Bulletin of the Educational Research and Development, Faculty of Education, Kagoshima University
2011, Vol.21, 1-7

論 文

伊集院頼子論　－新しい教師論の試み－

新名主　健　一〔鹿児島大学教育学部（国語科教育）〕・益　山　敏　郎〔南さつま市立加世田小学校〕
久木元　隆　浩〔南大隅町立第一佐多中学校〕・本車田　峻〔鹿児島大学大学院教育学研究科〕

A Study of Yoriko Ijuin : A New Teachership

SHINMYOUZU Kenichi・MASUYAMA Toshirou・KUKIMOTO Takahiro・MOTOKURUMADA Takashi

キーワード：伊集院頼子、ライフコース、比較研究

はじめに

伊集院頼子：以下，伊集院とのみ記す（昭和32年～平成21年，享年53歳　小学校教諭在職26年）は鹿児島大学教育学部国語科を昭和55年３月に卒業した。川辺小学校から東谷山小学校，そして田上小学校に異動した。田上小学校は代用附属で毎年たくさんの教育実習生を指導していただいている。その田上小学校での教育実習参観に行くと，決まって明るい笑顔で子ども達や実習生に接していた。その後，彼女は白川小学校から照島小学校勤務の平成15年５月９日，授業中に病のため倒れ，右腕・右手にマヒが残った。平成15年～平成18年まで休職する。復職した後，平成21年12月25日に亡くなった。（注1）

丁度，大学院の演習「国語科教育学特論Ⅱ」で「師の道」（鹿児島県校長協会発行，昭和48年から現在まで毎年発行がなされている）を輪読していたこともあり，伊集院の教職としての生涯をまとめ，意義を見出したいということが本論執筆の動機である。まず，これまでの教師論に重ねて、伊集院の残した学級文集や学級通信等を分析・検討していきたい。

そもそも教師論の目的の大きなことは立論することによって教師としての職能を最大限に発揮させ，教育の質を上げることであろう。

これまでの教師論は，たとえば小原國芳のように理想としての教師のあるべき姿を，主として心の面から論じたもの，さらに主として教育技術，言い換えると技に目をむけた斎藤喜博，向山洋一らの論，その両方にまたがる論を展開した東井義雄らの論の三つに大まかに大別される。（注2）

先の「師の道」は前年度に退職された校長による随想風の教師論である。その内容は心の面の振り返りであったり，経験則からくる理想としての教師論であったりで技に関する記述は少ない。あくまで本人の評価である。（注3）

伊集院が，どんな心を持ち，どんな技を持っていたのかを第三者として探ることは教師論のひとつとして意味がある。

これまでの教師論の観点に加えて，本論では，ライフコースからの教師論，比較研究からの教師論という，新しい観点による分析の可能性について言及したい。

研究の手がかりは，残された学級文集・学級通信・卒業文集，友人・母親の証言である。

第１章　年譜および評伝

年譜

昭和32年５月２日生まれ

昭和41年（小学校４年）下関市内の小学校から枕崎小学校に転校
　小学３年の時の担任，佐藤先生（若い男の先生）の影響を受け教師になることを決意

昭和45年　中学校３年の時，父親が病のため亡くなる。

昭和55年３月　鹿児島大学教育学部小学校教員養成課程（国語専修）卒業
　卒業論文「蕉門俳論の研究」（指導教官：田中道雄教授）

昭和55年4月　川辺小学校教諭
　学級便り（日報）「ぴかぴか号」発行

昭和56年　学級文集「おもいで日記」（２年１組）発行
　論文「一年生における言語要素の学習指導に

ついて」(「かわなべ　第１号，昭和56年度　川辺地区小学校国語研究会」)
昭和57年　学級文集「大空」(１年４組)
昭和58年　東谷山小学校教諭
学級文集「わくわく」発行
昭和60年　学級文集「つばさ」(６年２組) 発行
学級通信「THE Go-Go（５年)」「つばさ（６年)」発行
昭和62年　学級文集「あすなろ」発行
昭和63年　学級文集「リトルエンジェル」(２年１組) 発行
平成元年　学級文集「すみれ」(３年５組)
平成2年　田上小学校教諭
平成3年　学級通信「すみれ」(５年２組)
「不思議な出会い」(「絆」所収――睦郎校長の思い出――)
平成7年　白川小学校教諭
卒業文集「チャレンジャー」に寄稿
平成8年　卒業文集「はばたけ」に寄稿
県総合教育センター長期研修：長期研修日誌綴る
平成12年　「おもいで」を復刊し田上小学校の卒業生に配布（成人を祝う会)
平成13年　照島小学校教諭
平成15年５月９日　授業中に急性大動脈解離のため倒れる。
平成15年～平成18年８月31日まで休職　断片的な食事記録／日記を記す。
平成18年９月１日　照島小学校教諭として復職
平成20年　ノートに断片的日記を記す。
平成21年12月25日　没

評伝

伊集院は教師になろうと思ったきっかけを次のように記している。

「研修に来ている先生方は（略――引用者）みんな様々な夢を持って，それぞれに努力していた結果，たどり着いたところが教職だったという先生方がかなりいました。私は小さい頃，『刑事かお医者さんか先生になりたい』と自分の夢を口にしていました。でも小学校３年の時の先生が，とてもすてきな先生でしたので，『やっぱり先生しかない!!　先生になろう!』と心に決めて，今，夢がかなっています。私の教え子たちがどんな夢をかなえていくのか，とても楽しみにしています。」(「長期研修個人日誌」11月７日，平成８年度)

小学校４年～高等学校卒業まで親交のあった亀山美枝子氏の次の文章に伊集院の人柄・育った家庭環境がよく表われている。

「賢く，穏やかな性格の彼女は，転校してすぐに学級委員となりました。児童会の副会長も勤めました。田舎の学校でしたので，ピアノが弾ける子は大変珍しかったのです。やさしい声で歌いました。合唱部にも選ばれていました。当時，彼女はおそらくクリスチャンだったと思います。(略――引用者）彼女といるとき，私は安らぐのでした。女子からも男子からも憧れの存在でした。書も上手でした。絵も上手でした。なんでも上手に出来ました。お母様も大変慈しんで育てておられました。(略――引用者）子供ながらに，和やかで温かい雰囲気が感じられるおうちでした。」(亀山美枝子氏からの新名主宛Ｅメール，2010年12月13日)(注4)

さて，伊集院の思想的基盤としてキリスト教があったことは，その教育実践の中に散見される。学級文集「つばさ」の表紙には天使の絵が，「おもいで日記」の見開きの頁にはユリの花を足下に昇天していく天使が描かれている。同書のカットとして教会が描かれている。また学級文集「リトルエンジェル」(傍点―新名主）という題がつけられている。また，ことばとしては学級文集「わくわく」の「おわりに」の吹き出しの中に「神さまからも人からも愛される子どもでいてね」がある。ただ学級文集の中で宗教色が出ているのは初任の頃だけである。

伊集院はキリスト教を信奉して止まなかったのであるが，後年，平成17年９月，ある理由で母子共に教会から離れることになった。その理由を記すことは本論には関わりがないので省く。しかしながら伊集院は「教会を離れても神様からは離れません」(闘病記録より)と記している。

学級文集の中に出てくるのが，次の二つの詩である。

庭にたちいで　たゞひとり
秋海棠(しゅうかいどう)の　花を分け
空ながむれば　行く雲の
更に秘密を闡(ひら)くかな
（「おもいで日記」）

一筋の道を歩くなり
こつこつと　歩くなり
淋しくも　歩くなり
つまらぬ道と　他人はいへども
彼は　その道を愛して
こつこつと　すすむなり
（学級文集「大空」，「わくわく」，「つばさ」）

前者の原作は島崎藤村，後者は武者小路実篤である。(注5)二人共キリスト教の影響を受けていたので，おそらく教会等で知った詩と推測される。伊集院の生き方・信条を代弁したものであろう。

次に伊集院の教育観・人生観を検討する。

・「文集の中の一文字一文字のように，純真な心を持ちつづけることを心から願ってペンを置きます」（昭和55年「おもいで日記」）

・「みんなが大きくなったら，またこの文集をひらいてみて，とてもきれいな心のじぶんにかえることができるはずです」（昭和56年「大空」）

・「私もこの文集を見るたびに，皆やお母様方を思い出すことでしょう。どんなベテランになっても新米の頃のじぶんを忘れないために，いつも新しいファイトを燃やすことができるように私の宝物として大事にしたいものです。」（昭和60年「つばさ」）

・「これからの皆の毎日が苦しみも悲しみも自然に喜びに変わるよう，どこにいても応援しています。」（昭和63年「リトルエンジェル」）

・子ども達に対する思いは，「無条件で大好きな一人一人です。」（昭和59年「わくわく」）

「先生，このクラスで一番好きなのはだれ？」という問いに「世界で一番君が好き，みんなどうしてこんなにかわいいの」（平成２年「すみれ」）と記されている。

母親の禮子氏によると，伊集院は教師になりたての頃から病に倒れてからも，毎日の学校での子ども達のようすとできごとを，それはもう楽しそうに，うれしそうに話していたという。（平成23年６月25日，伊集院宅での母親への本車田によるインタビュー）

教育観，人生観，児童観は初期の頃宗教色が出ているが，以後は見られない。終始一貫して，共に生きることの喜び，うれしさが貫かれている。禮子氏によると家庭でのしつけの中にも「共に生きる」ということが大きな柱としてあったという。(注6)

そのような伊集院に対して，子ども達や保護者からの信頼には絶大なるものがあった。その根拠は枚挙に暇がないほどであるが，それぞれ2例ずつを引きたい。

・「先生この一年どうもありがとうございました。おかげでとてもいいおもいでができました。二年生になって先生が台にたったときあの先生になってほしいなあとおもうとほんとうになってくれました。でもおこるのは、やっぱりこわいでした。でもわたしは先生が大すきよ。」（昭和58年「わくわく」）

・「伊集院先生、三年間ありがとうございました。わたしは一年生から、ずっと伊集院先生でうれしかったです。伊集院先生のえ顔を見ると毎日が楽しいです。」（平成２年「すみれ」）

保護者の伊集院への感想

・「あと数日で進級できると感激でいっぱいです。入学時の不安は母親であるわたしにも計り知る事はできませんでした。育児がまちがっていたのではと悩みました。でも１年もたつと成長したことが感じられます。一口で言い表すことはできませんが，先生に担任していただいたおかげです。勝手なお願いですが２年生の担任も先生にお願いできないでしょうか。他の御父兄の方も願っていらっしゃると思っております。」（昭和57年「大空」）

・「新しいクラス発表の日，帰ってくるなり，子供に何組だった，誰先生だったと聞くと５組で伊集院先生だったと言いました。伊集院先生の評判の良さは，かねがね聞いておりましたので，私もとてもうれしいでした。子供の３年生になってか

らの様子を見ていますと今までずっと眠っていた子が起き上がる程の変わり様でした。」（平成２年「すみれ」）

新年度になり，クラス担任の発表があると子ども達は歓声をあげて喜ぶか，タメ息をつくか，極端に分けると２通りに分かれる。子ども達の教師に対する評価があらわれる。もちろん，その評価は教師の一面である。しかしながら子どもや保護者から喜びを持って迎えられる教師であり，その上社会からの負託を全うできればこれに過ぐることはないであろう。

伊集院はその思想的基盤としてキリスト教があり，喜びを見出す毎日を送っていたと言える。特に子ども達と会うことがうれしいということが初任時より病に倒れるまでの記録物からとらえられる。

残された記録物，友人，母親からの証言から，その喜びやうれしさの内容は終始一貫しており，変遷を捉えることはできなかった。

第２章　比較研究的観点からのアプローチ

これまでみてきたように伊集院は，小学校の教師として当時の児童や保護者，そして同僚や管理職からも絶大な信頼を受けていた。ここでは，その信頼の背景を，「求められる教師像」という視点から考えたい。

当時の子どもたちや保護者が教師に抱く理想の教師像とはどのようなものか。最初に子どもたちについてである。出版社のBenesse教育研究開発センターが1983年に刊行した「モノグラフ」という雑誌に興味深いデータがある。この雑誌では，「子どもの求める教師像」というテーマで特集が組まれていた。その中で，小学校の教師を次の４つに分類した上で，小学生がどのタイプの教師を望んでいるか，その調査結果を報告している。以下に引用する（注7）。

	属　　性	「とても」「わりと」そう思うと答えた割合
熱心型	子どもとのかかわりが深く子どもに対する要求もきびしい	47.1％
保護型	子どもとのかかわりは深いが，子どもに対する要求はあまい	44.5％
管理型	子どもとのかかわりは浅いが，子どもに対する要求はきびしい	29.9％
放任型	子どもとのかかわりが浅く，子どもに対する要求もあまい	10.2％

つまり，このデータから当時の子どもたちは，「熱心型」「保護型」の教師を望んでいたことが分かる。ちなみに，このアンケートでは，具体的な場面を設定して，そのような先生に教わりたいかどうかを問うているのだが，上位には「鉄棒・とび箱ができるまでみてくれる（熱心型・56.3％）」，「きびしくしかるが理由を教えてくれる（熱心型・54.2％）」，「わからないところをわかるまで残して教える（熱心型・48.8％）」などがあり，単にただ優しいだけの教師を児童が望んでいないということも容易に予測できるであろう。

次に保護者についてである。こちらは伊集院が勤務していた当時のものがなく，2005年に出版社のBenesseが，web上で行ったアンケート結果について紹介する。このアンケートは，「Benesse教育研究開発センター」が行ったもので，質問項目の中に，「理想の教師像」を問う質問がある。結果報告の一部を引用する（注8）。

■　先生に期待するのは「厳しさ」「人間味」「愛情深さ」そして「個性を生かすバランス」

今回のアンケートでは、学校の先生に求める理想像を伺っています。

キーワードをまとめると、「厳しさ」「人間味」「愛情」そして「個性を生かすバランス」の4点が浮かんできます。

そして、そこには今の学校に対する期待もたくさん込められていました。

Ｑ９：あなたにとっての理想の先生とはどのような先生ですか？　（アンケートより）
・基礎をしっかり学習させた上で、学校での集団生活の指導をしてくれる先生。小学生の場合は、子どもの気持ちを理解した上で人の気持ちを思いやる心を育んでくれる先生。中学生であれば、教科学習のおもしろさを授業に取り入れてくれ、担任としては難しい年頃に子どもの気持ちに寄り添いながら、基本的な社会生活を指導してくれる先生。
・最近の先生の傾向として子どもの声が聞こえない、があります。子どもが本当に言いたい事が先生に伝わらないようです。先生も全体に気を配り、見渡す心の余裕がないようなので一方通行になっています。一番理想的な先生と言うのは子どもの心にいつまでも残るような信頼できる人間です。
・常に子どもたちに目をむけてくれる。だからクラスがバラバラになることもないし、いじめも起こりにくい。授業も押し付けがましくなく、子どもたちに分かりやすく、宿題にもきちんと目を通してくれる。保護者に対しては、クラス通信などで、今、学級では何をしているか、どういう雰囲気か、知らせてくれる。良いことも悪いこともクラス通信（プリント）などで先生の言葉で知らせてくれる。
・厳しくても愛情をもって接してくれる。勉強以外のことを自ら実行しながら教えてくれる先生。
・個性を尊重しつつ、子どもの意見を素直に聞いてくれて、子どもから信頼される先生。

このアンケートは，学校種を問わず行っているものだが，見出しにもあるように保護者は，「厳しさ」や「人間味」，「愛情」，そして「個性を生かすバランス」といった要素を教師に求めていることが分かる。

ここで一つ，注目した意見がある。アンケートの最初の回答である。この保護者は小学校と中学校の場合に分けて，理想の教師像について回答しているが，これは児童・生徒の発達段階とも関わっている。つまり，小学校の時は豊かな人間関係の中で，教師が主体的に関わっていくことが，中学校では，関わりながらも自立を促し，時には生徒同士での活動を見守ることが求められているからではないだろうか。

以上のようなことを踏まえて，伊集院の子どもたちとの関わりを考える。学級通信で学校の様子（出来るようになったこと，今学習していること，子どもたちに足りないことなど）を熱心に伝えていること，愛情表現としてキスをして，それを児童も受け入れていること，「伊集院先生のおかげで〇〇ができるようになった」「伊集院先生はこわかったけれど…」という言葉が文集につづられていることからも，伊集院が，決して妥協しない厳しさを持ちながらも，愛情をもって児童と接していたこと，また児童もその姿をみて伊集院のことを信頼していたことが分かる。

伊集院が小学校の教師として児童や保護者，そして同僚や管理職から絶大な信頼を得ていた背景にあったもの，それは，理想の教師像を具現化した，厳しくも温かく，愛情をもって接していた教師としての姿ではなかったのだろうか。

第３章　ライフコース的観点からのアプローチ

本章では，ライフコース的観点から伊集院の個体史研究をする。考察にあたっては，ライフコース研究で用いられるデータ収集法を視点として取り上げ，伊集院の個体史研究における問題点や今後の活動の展望について述べる。

伊集院は、学級週報や文集を年ごとにファイリングし保管していた。また、食事記録の中に来訪者や出来事，思ったことなどを闘病日誌的に記録していた。これら本人の手記による記録から，伊集院を取り巻く環境や伊集院の心情といったデータを収集することができる。いわゆる復元法とよばれるデータ収集法である。復元法とは，既に人生を終えた人々を対象にし，残された資料を利用してデータを収集する方法である。

伊集院の個体史を編纂する上で，伊集院がどのような教育観や人生観を持っていたかを明らかにすることが重要となるが，伊集院氏の教育観や人

生観を復元法を用いて解き進めていく上で問題となる点を２つ挙げる。一つは，残された資料が少ないことである。もう一つは，回収された資料がある一定期間に作成されたものに偏っているということである。回収できた資料を見ると，日報や週報・学級文集等，年ごとにファイリングされており保存状態も良好である。しかし，これらのデータは，伊集院が教職についてから病休をとるまでの期間に限定されている。教職に就く以前のデータや病休をとってから亡くなるまでのデータが不足している。教職についてからのみのデータで，伊集院の教育観・人生観がどのように構築されていったのかを全て明らかにすることは困難である。なぜなら，教育観や人生観というものは，教職についてからはもとより教職に就く以前の生育歴や教育歴をも含んだ形で構築されるものだからである。(注9)

限られた資料をもとに伊集院の教育観や人生観を明らかにするためには，３つの「時間」(注10) から伊集院のライフイベントを拾い上げ，考察してく必要がある。３つの「時間」とは，教職についてからの期間，いわゆる社会時間（家族や職業などの周期）の他，個人時間（加齢・成熟）や歴史時間（時代）がある。今回収集できた資料は主として社会時間の枠組みで括られるものである。しかしそれは，資料を＜社会時間＞という一つの視点から区分しているに過ぎない。ならば，同一の資料を＜個人時間＞や＜歴史時間＞の視点を持って読みとることにより，一つの資料から複数のデータを得ることが可能となるのではないかと考える。

データが少なく，一定期間に限定されているという問題点を解決するためのアプローチとして，故人に縁のある人物に対して回想法を用いてデータを収集することが有効であると考える。その際，留意すべき点を以下に挙げる。

(1) 時間経過による記憶の薄れや歪み

例えば、伊集院の母親に対して，個人の幼少の頃を尋ねたとする。そこで回答される出来事は時間の経過により曖昧になっている部分があり，必ずしも事実とは限らないということを調査者は理解しておく必要がある。

(2) 時間経過による主観的事実（意識）の変化

主観的事実の変化に関して大久保考治は以下のように述べている。

> 客観的事実は時間の中で変化することはないが，主観的事実（意識）は時間の中で変化することがある。なぜなら回想という行為はあくまでも現在の視点に立って行うものであるからである。過去は現在を規定するけれども，現在もまた過去を規定するのである。人間的な時間においてはこうした相互作用が存在する。したがって，主観的な事実については，それは純粋に当時のものではなく，現在の自分が過去の自分について行った解釈なのだと心得て利用しなくてはならない。(注10，p. 32)

個人の縁者に対して行われるインタビューにおいて，インタビューで収集されたデータ（回想）が対象である縁者の主観であるという事実と，その主観が個人と接触をもった当時のものではなく，今現在の個人と縁者の関係を示すものであるという事実を認識した上で客観的にデータを整理することが研究者の心構えとして必要となる。

伊集院がキリスト教会から脱会した事実は、外的経歴（家族経歴や職業経歴）として挙げることができる。この外的経歴の変化と内的経歴の変化（ものの見方や考え方）がどのような関係にあるのかを読み解くことは，伊集院の個体史を編纂する上で重要な作業である。しかし，外的経歴と違い内的経歴は不可視的である。内的経歴を知るためには，本人が残した手記からその変化を読みとる作業が必要となる。幸いにして伊集院の場合，闘病記録の中に教会からの脱会に関する心境が残されている。公証役場に行ったこと，結審日時など外的経歴として挙げられる記載も見受けられる。また、「裏切られた」「信用していたのに」といった内的経歴として挙げられる記述も折に触れ記されている。

このことに関する外的経歴と内的経歴を比較した場合，注目すべき点がある。それは，教会からの脱会という外的経歴の変化が，キリスト教との

別離という形で内的経歴の変化になっていないという点である。脱会した後の闘病記録の中に，「神様を信じています」といった，未だにキリスト教を信仰していると思われる記述が頻繁に見られる。これらの記述は、脱会後も伊集院がキリスト教を信仰していたことを明らかにしている。

キリスト教会からの脱会は、伊集院の信仰の程度から考えて人生の転機（turning point）として位置づけてよい出来事である。この人生の転機により，伊集院のライフコースがどのように方向転換されたのか。今後明らかにしていくことで研究が深まるであろう。

おわりに

伊集院の教育力の根底には，共に生きる喜び，子どもと相対する時のうれしさがあった。そのことはキリスト教信仰によって培われた彼女の生き方であり，また母親との相互交流によって覚醒された人間としての生き方であったと言える。今回，技についての分析はできなかったが，その思想的基盤は明らかにすることができた。その特徴には終始一貫して，喜び・うれしさがある。このことが伊集院の教育実践を支えていたものである。

没後，ダンボール箱30箱ほどが処分されたという。残された，限られた資料からの記述にはどうしても限界がある。ただ，伊集院を研究することで，新しい教師論の観点を得た。今後，ライフコース的観点・比較研究的観点を，よりきちんとしたものとして構築していきたい。

注１　伊集院のお通夜・葬儀では，死亡広告はなかったにもかかわらず，その参列者は300名を越えたという。

注２　小原國芳（「全人教育論」玉川大学出版部 P129)，(「師道」玉川大学出版部，P97)

斎藤喜博（「斎藤喜博全集」全18巻，国士社）

向山洋一（「教育技術の法則化」明治図書，1985年）

東井義雄（「東井義雄著作集」明治図書）に詳しく紹介されている。

注３　あくまで本人の記述に即して読みとった場合であって，当然，あの太宰治が「走れメロス」を著わしたように実態とはかけ離れた理想化，美化があることも考えられる。

注４　亀山は，小・中・高と同じ学校で学び，同じテニス部で活動してきた友人である。伊集院の告別式での弔辞は感嘆の的であった。

注５　「若菜集」（明治30年）（「島崎藤村全集第二巻」P78，新潮社）が出典であるが，原文と比べると行変えが若干異なる。

（「武者小路実篤全集第十一巻」P104，小学館）の原文からすると省略された部分がかなりある。

注６　伊集院禮子氏へのインタビュー：平成23年６月25日　本車田峻　　また，会葬お礼状の一行目に大きな字で「皆様と共に歩めた娘は幸せでした」とある。以下，礼状を引用する。「伊集院先生」「頼子先生」と大人になってからも慕って下さる教え子の皆様は，娘にとってまさに生き甲斐でした。身体がどんなにきつかろうと，仕事を休むことがなかったのは，そこにいつも大好きなこども達の笑顔があったからこそ…。別れを迎えるには，早すぎる年齢ですが，教師という天職を得て，教え子の皆様はじめ，素晴らしいご縁に恵まれた娘の人生は，時間では計れぬほど満ち足りて，幸せだったと信じています。（以下略――引用者）

注７　（チャイルドリサーチネット『モノグラフ・小学生ナウ』より）

http://www.crn.or.jp/cgi-bin/LIBRARY/disp_mokuji.pl?&sassi=M2&vol=3-9

注８　（Benesse教育情報サイト『これからの教育に望むもの』より）

http://benesse.jp/blog/20050720/p1.html

注９　稲垣忠彦，寺崎昌男『教師のライフコース－昭和史を教師として生きて』松平信久編，東京大学出版会，1988年，p. 4

注10　大久保孝治，嶋崎尚子『ライフコース論』放送大学教育振興会，1995年，p. 156